ごあいさつ

学校長　南　　正　樹

2022 年度の『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』を刊行します。

本研究紀要も今号で第 45 集となりました。これまで，約半世紀にわたり，附属小学校の教育実践を内外に発信してまいりました。その間，現行の学習指導要領を含め，学習指導要領も実に５回の改訂が行われました。これからも，和歌山大学教育学部の附属学校として，一層研究を深め，教育実践を重ねてまいりたいと思います。

さて，本校は，身に付けさせたい資質・能力を探究力と省察性と定義し，「未来に生きて働く資質・能力の育成」を研究主題に設定して，研究を進めてきました。１年次である 2018 年度は，探究力と省察性の育成を可能にする学びを探究的な学びとし，研究副題を「探究的な学びとカリキュラム・デザイン」とし，研究実践を進めました。また，探究的な学びを捉えるために主体・協働・活用・省察といった４つの姿に着目をして，これらの４つ姿がより豊かに繰り返し見られることを探究の質の高まりと定義して，その姿をめざしました。２年次（2019 年度）は，前年度の研究を受け，主体や協働の姿はよく見られるものの，活用や省察の姿には課題があると考え，研究副題を「探究力を育むカリキュラム・マネジメント」とし，活用の姿がより豊かに繰り返し見られるようになることをめざし，研究実践を進めました。さらに，３年次（2020 年度）は，研究副題を「探究の質を高める授業づくりの『しかけ』と評価」とし，省察の姿がより豊かに繰り返し見られる授業づくりのしかけと評価について研究実践を進めました。４年次（2021 年度）にあたる昨年度は，研究副題を「子どもが『自己調整』を行う場面を生む『しかけ』」とし，子ども自身が主体・協働・活用・省察の姿をより豊かに繰り返し見られるようにすることを『自己調整』と定義し，そのような場面を生む教師の手立てについて研究を進めました。

本年度は，これまでの４年間の研究を踏まえ，研究副題を「発達の段階を視野に入れた『探究』のしかけ」とし，子どもたちの発達の段階を視野に入れた『探究』の姿を設定し，設定した姿を具現化するための教師のしかけ（教師による様々な手立て）を明らかにすることをめざして研究を進めてきました。具体的には，子どもが既有の知識・技能を活用しながら主体的に考え判断したり，協働したり，自己の学びを省察したりし，よりよく問題解決する学びの姿を引き出すために，低学年から高学年まで発達の段階に応じた指標を作成し，その姿を引き出すための教師の手立て・支援の在り方を明確にすべく取り組みを進めてきました。そして，それらの授業実践を 2022 年 11 月に教育研究発表会にて提案させていただきました。

本研究紀要では，その他，校内研究授業，複式授業研究会，ICT 活用授業研究会，和歌山大学教育学部との連携事業等をとおした取り組みについても，研究成果という形で掲載させていただいております。ご高覧いただき，様々な角度から忌憚のないご意見を賜り，本校の研究を一層推進すべく努力してまいりたいと思います。

最後になりましたが，本校の教育・研究活動の推進にあたり，ご指導，ご助言をいただきました皆様に厚くお礼申し上げるとともに，今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。